

Fast life, slow life

村越真のオリエンテーリング日誌 2008年6-7月

毎週のようにレースかロングトレイルにでかけた6月、IOF 理事会・総会と韓国でのアジア選手権支援に慌たたくしく過ごした7月。対照的な二月。

相馬効果

6月7日

静岡市街地の北方にある竜爪山にトレイルランニングに出かけた。これもまた相馬さんに刺激されてのことだ。竜爪山をめぐる約28km、アップ2200mのトレイルだ。

コースの多くは走ったことがある。一部不安があるので、地図は持って行こう。さすがにコンパスは要らないだろうと思ったが、1ヶ月後に「道迷い遭難のリスクマネジメント」と称して全国の遭難対策関係者の前で講演をする身。リストコンパスを手にした。

竜爪山近くの山稜を走るところには相当疲労もたまり、注意力も散漫になっていた。ほぼ真北に向けた尾根を走りながら、ふと身体の前にリストコンパスをかざしてみると、磁針が正面よりも左にある。つまり東を向いているのだ。竜爪山に向かうには西向きの尾根を降りなければならない。尾根が東を向くのは、その分岐を過ぎてからだ。戻ってみると、さきほど踏み跡が薄くなって、目をこらして続きを探した場所、実は直角に左に曲がらなければならなかったことが分かった。よく見ると、倒木で行き止まりがしてあるし、道標もついていた。注意力がないと、いとも簡単に道迷いするものだ。そして、コンパスのリスクマネジメント機能を体感できた。10分のオーバーランと引き替えに、原稿のネタが一つ得られた。

スタートが遅かったせいもあって、竜爪山頂ではすでに14時をまわり、それ以上に走る気力をなくして、しばし横になる。そのままエスケープルートを下って帰ってきた。アップ1600m。距離こそハセツネの1/4にも満たないが、アップは4割を越えている。ハセツネ11時間に向けての始動である。

6月14日

先週のリベンジに竜爪山に出かけた。バス終点からまず竜爪山に登り、その



霧ヶ峰ロゲイニングでは8秒で優勝を逃し、3位に。「ハンディー」ありがた、巡航速度も柳下にひけをとらなかつた。これからは「ロゲイニングの上皇」を名乗ろうかしら。

後市街地に向かってまっすぐ尾根道を走る。結局、途中の桜峠では第二東名の工事でトレイルが分断され、竹藪と放置された茶畑のものすごいやぶごきを余儀なくされた。リベンジなるも、家に帰ってからは胸のつかえを感じてややブルー。

6月15日

朝6時、実家に帰っていたチャコからお義父さん逝去の知らせがあった。ガンであることは分かっていたし、人工肛門の手術は受けていた。表面的には動揺はなかった。後で分かったことだが、奇しくもこの日、オリエンテーリング界の重鎮、黎明期からスポーツとしてのオリエンテーリングを牽引した青木弘氏が亡くなっていた。時代は少しづつ移り変わっていく。

6月20日

朝一で病院に行った後、統計学の授業をして、午後は県庁で会議。その脚で羽田に行き、韓国へ。21日、22日の週末は韓国でコースチェック。帰りの空港に向かう途中、犬肉を食べに連れて行ってくれた。身体を冷やしてくれるので、この季節の滋養食なのだそう

だ。車さんが、「うちの実家でも6匹犬飼ってますよ、食用ですけど」と、にこやかに解説してくれた。

Slow life in the fast lane

6月25日

自転車通勤。午前中の体育の授業はピクニック。陸上競技場の草地にブルーシート広げて、お茶したり、おしゃべりしたりするだけの授業だ。それではあまりに手抜きなので、ペタンク、フリスビー、なんちゃってヨガのミニ教室も15分づつ開講する。昨年付け焼き刃的に習ったヨガも含めて、「リラックスできた」「のんびりできた」と授業後の感想も好評であった。自分ものんびりできる楽しい授業であるが、学生たちでさえ、意識して時間を作れないと、のんびりした時間が持てないとは。

午後は、同僚の小山さんに誘われて静岡気象台で開かれた牛山先生の講演会に出かけた。彼の方からのご指名があったという。近頃、研究室の輪講で僕の空間認知の論文を読んだとのことだった。

豪雨災害を研究している彼は、「豪雨で多くの溺死者が出る」「高齢者が犠牲になっている」という言説をベースにした災害対策に疑問を持ち、過去の新聞記事で豪雨災害の被害者の属性や被害の状況を調べた。その結果、豪雨で溺死するのは確かに高齢者が多いが、その多くは「巻き込まれた」というよりも「畑の様子を見に行った」といった、アクティブな死者であった。また逃げ遅れた高齢者が犠牲になるケースは一部の土砂災害を除いてほとんどない。さらに、地震の災害は非常に話題になるのに、トータルで見るとはるかに多くの方が豪雨災害で亡くなっているが、十分報道されていないことにも、疑問を感じていた。

彼の考えは、そのまま学校でのリスクについても当てはまる。学校では、不審者に殺されるよりはるかに多くの子どもが事故（交通事故を除く）で死んでいる。その中には原因が分かっているにも関わらず、何度も繰り返される事故も少なくない。また新聞によってかなりの状況が把握できるという研究手法にもヒントを得た。ちょうど7月の山岳遭難の全国会議で遭難者の状況について発表しようとして、なかなか警察から適当なデータが集まっていない状況であったので、そのアプローチは大いに参考になった。

飲み会までおつきあいして、自転車で帰る。楽しかったのだが、この無理がその後数日自分を苦しめることになる。



竜爪山トレイルランニングコースより清水を望む。これも相馬効果の一つ。

リベンジ

6月26日

走る気になれないほどの疲労感に久しぶりに見舞われる。いつものように食欲もなかったが、その割にはよく食べられた。翌日は頭がじんじんとするような不快感を感じる。走りはじめとスピードを上げると、胸と気道が苦しくなる。なにかが詰まっているような感じさえする。あさってアドベンチャーレースを走ることが想像もできない。

6月28日

近くで開かれる大会は、ゆっくり起

きてのんびり出かけられるのが嬉しい。おまけに午前中いっぱい仕事までできてしまった。その後大学によったのが運の尽き。アジア選手権のリレーの地図が完成してメールで届いていたのだ。訪韓中の寺島君に確認してもらったため、コースの概略をいくつか仕上げた後、フリーフィング会場の芝川のナチュラルアクションに向かう。フリーフィング後、東京から来たまどかさんに、やきそばとお好み焼きを食べてもらい富士宮気分を味わってもらった。西の家のバンガローでひとときの休息。

6月29日

もともと早起きの苦手な僕は、オリエンティングであれアドベンチャーレースであれ、いつもスタートがもっと遅ければいいのと思う。この日は6時にプレースタート。4時に起きて、簡単に朝食を済ませて会場に、荷物をデポジットして河原のラフトスタートへ。スタート順を決めるラフトのプリントレースでいきなり失格をくらい、最下位になる。上位チームから2チーム一組で本番のレースが始まるが、今回は出場チームが奇数なので、余った僕は漕ぎ手が半分の状態です。漕ぎ手をしなければならぬ。いきなりの大ハンディーを食らうが、ここが気持ちの踏ん張りどころ。川岸の崖沿いに沿って設定されたCP1では、細い崖づたいの道で渋滞しているのを尻目に、上の段のヤブ漕ぎで他のチームを出し抜き、いっきに順位を10上げる。その後のとろい流れは腕の筋肉が限界に来ていたが、おかげでガイドから「力が抜けたいい漕ぎですよ」と誉められる。その後のトランジットとMTBの前半で順位を下げたものの、ナビゲーション区間で順位を上げて7位へ。初出場のカツオさんと脚に不安のあるまどかさんとのチームであることを考えれば、上出来だろう。最後は、僕とカツオさんでまどかさんをロープで牽引して走り続ける。「巨人の星」のオズマの練習を思い出させる拷問行為である。長良川のレースで関門に引っかかったリベンジを果たす。

6月30日

前日、3人でラフトをこぎ続けたついで、腰に痛みが出た。この手の痛みは現役時から慣れており、対処法も分かっている。骨盤を回して、前下方に軽く引っ張るようにテープを貼ると、負担が減って痛みが和らぐ。

この日は県大でのリクリエーション援助法の授業。フォト0を実施した。2クラスとも楽しそうに駆け回っていた。保育関係に進む2年の子は、ぜひ

保育園でやりたいと言ってくれた。

ロゲイニングの上皇

7月4日

名古屋で行なわれた全国遭難対策協議会に基調講演で呼ばれた。中高年登山が圧倒的多数を占める今、道迷いから滑落遭難というのが登山界全体の問題になっている。しかし、もっと問題なのは、そのリスクがいったいどれほどのものか、誰も正確に把握していない点にある。毎年この協議会では、警察庁から山岳遭難統計が発表される。しかし、その多くは単純集計で、年間600余名の道迷い遭難のうちいったい何人が登山によるもので、何人が山菜採りによるものなのかさえ分からない。道迷い遭難の多くは無事発見に終わるが、死者や重傷者がいるのかどうかも分からない。

警察庁に問い合わせても、個々のデータは県警本部から上がってこないという。仕方ない！各県警本部の担当者も集まる協議会の講師に指名されたことを逆手にとって、関東から近畿に至る県警本部に電話をかけて、資料の提供を依頼した。結局10を超える県から資料の提供を受け478件という、道迷い遭難の約1/3をカバーする貴重な事例データを集めることができた。道迷いが絡む遭難は、統計の数字に比べて15%は多い。その潜在的道迷い遭難は、死亡、重傷という重大なリスクを抱えている点である。講師を引き受けた甲斐ある情報であった。

その後、ヘリによる救助活動の分科会の事前準備を覗かせてもらった。いかにもフィジカルエリート然とした防災航空隊の副隊長が、ヘリを使った救助のビデオをたっぷり見せてくれた。風速20mを越えるとヘリはホバリングが難しい。そんな尾根上での救助の様子やら、気胸で一刻を争う遭難者をドクターヘリとコラボレーションして救助する現実、前日から始まったTVドラマ「コード・ブルー」以上の迫力だった。



霧ヶ峰ロゲイニング前日の講習会は、気持ちよい屋外での講習となった。11名の受講者があった。ほとんどがオリエンティングの初心者であることに、この競技の可能性を感じる

7月5日

霧ヶ峰ロゲイニングに向かう。利佳ちゃんのご要望で昼はマウンテンバイクでミニツーリング。その後 15:30 からは、ロゲイニング対策講習会を行なう。11名の参加者の多くがオリエンテーリングの初心者だった。そういう人たちと出会えるのは嬉しい。夕食はりかちゃんと素敵なスウェディッシュディナー。

7月6日

霧ヶ峰ロゲイニング当日。ふたを開けてみると、ロゲイニングの帝王柳下と同一プラン。途中ルートチョイスで先行されるが、出戻りレグではタイム差が広がらないのが分かる。2時間を超えるあたりから、脚のあちこちが痛み、登りもペースダウン。そんな中で残り時間を計算しながら、ここから先は捨てる、このコントロールを取るとプランを柔軟に変えながら時間と戦う緊迫感が楽しい。15分前通過なら直帰で確実に時間内フィニッシュというチェックポイントを16分前に通過、直帰か82点を狙うかという地点で残り7分40秒、直帰なら確実に制限時間をクリア、82番を狙えば1.4km、5分/kmでクリア。下りの岩石マークを加味すれば、成功確率は3:7と見た。+1分以内なら確実に戻れる、30%の確率で82点を得て、70%の確率で18点を失うなら、期待値を考えれば間違いなく勝負だろう。マイナス100点は食らったが、最後まで諦めずに攻め続けた満足感が残った。順位も3位。これからはロゲイニングの上皇を名乗ろうかしら。

Beyond imagination

7月12日

中部国際よりブラハへ。セントレアは、成田のような雑踏がなく、北欧の空港気分だ。おまけに最新の空港はビジネスコーナーも充実していて、電源もネットも使い放題。昨晚遅くまでかかって修正したアジア選手権の地図と技術情報を尾上さんと寺島にメールで送る。さすがに眠くて、離陸待ちと機内で2時間以上爆睡。日本時間で深夜についたブラハで、一泊。

チェコに初めてきたのが28年前、その時は国境を越えるのに、列車が中立地帯で止められ、車両の検査からパスポート、ビザの検査まで、うっとおしい手続きが続いた。その次にチェコにいった1991年の世界選手権の時は、国内でレンタカーが借りられるほどになっていたが、やはり英語が通じる場所では少なく、なんとなく移動が不安な国であることに変わりなかった。それが今はどうだ。空港で入国する時にパス

ポートの提示すら求められないとは。おまけに空港にマックからスタバまである。この17年間の変化にはびっくり。

7月13日

ブラハからオルモツツへ移動する。それほど高級とも思えない宿で、おまけにインターネットでオルモツツまでの列車とバスの時刻表を調べてくれた。空港からこの宿までの10kmあまりのタクシーが400コロナ、ブラハからオルモツツまでの列車250kmが300コロナ。いったいこの国の物価はどうなっているのだ。

日本チームの宿舎を訪れて時間をつぶしたあと、そのままスプリントレースへ。プレスタートに移動するリ・ジに会ったので、ハイタッチで激励した。中国女子はスプリントで3名の予選通過者をだした。世界選手権が始まった。



スプリントで最終コントロールに向かうリ・ジ(中国)。中国は3人予選通過だ。



我らがヨーコ・番場は、リ・ジの直後に現れた。

14日、15日は理事会が行なわれ、僕にとっての仕事は半分終わった。さすがに二日目はくたくただった。翌16日には、トレイル0の会場で、4.7kmのVIPレースがあった。トレイル0の世界選手権では木島さんは苦戦していたようだが、山口君は5位入賞。杉本氏のホームでの3位は素晴らしいが、それに負けず劣らずアウェーでの5位も素晴らしい。その後のVIPレース、確かに好調とは言えなかったが、フィンランドの宿敵ミッコには1分負けだが、ホバートには4分も負けた。夕方は2013年に世界選手権に立候補したフィンランドの招致活動のレセプションを楽しんだ。和気藹々とした招致チームの雰囲気がちよっぴり羨ましかった。

7月18日

今日は、一日総会があり、その後は明日午前の出発に備え、移動。8時よりスキー0のマルコと世界選手権の打ち合わせ後、総会に望む。理事としての仕事も終わると思うと、若干の感傷が生まれる。初遠征から28年。東欧も変わったが、自分自身がこんな生活をするようになるとは想像だにできなかった。

アジアからは新しい理事として韓国のエリオット・リー氏が選ばれた。彼がアジアの代表としての仕事をうまく引き継いでくれるだろうか。ブラハに移動し、夜は一人でカジュアルなレストランで、チェコ風の食事をとり、しばし感傷にひたった。

(村越 真)



トレイルの山口選手はオープンクラスで5位。2005年に杉本氏の3位とともに誇れる成績だ。



新しくIOF理事となった韓国のエリオット・リー氏(左)と、IOF総会にて。これからのアジアを代表し、活躍してほしい。



アジア選手権を終えて、3年越しの念願の焼き肉に。The Last laneのなかの瞬間のslowな時間が流れる。